

平成 23 年 5 月 24 日
富士見市立富士見特別支援学校 P T A
会長 関根 健一

1. 経緯

平成 23 年 3 月 11 日、三陸沖を震源とするマグニチュード 9.0 の地震が発生し、その影響で起きた巨大津波により、東北地方を中心とした地域に甚大な被害をもたらした。これを受け、会員からの要望もあったことから全知 P 連として義援金募集を始めた。しかし、義援金の運用に関しては問題点も多く、集まった義援金の送金方法等の検討が必要になった。そこで、被災地の意見なくして解決方法は探れないということと、何よりも一刻も早くお見舞いの意を伝える為に被災校への現地調査を行うこととなった。

2. 参加者

関根 健一（全知 P 連理事・埼玉県）
前田 正史（全知 P 連理事・滋賀県）
和泉 泰弘（協力者・写真記録）

3. 日程及び行程

平成 23 年 5 月 4 日～11 日

1 日目	滋賀より前田出発	
2 日目	埼玉にて関根・和泉合流、花巻へ	花巻泊
3 日目	花巻清風支援学校訪問（校長、P T A 会長） 宮古恵風支援学校訪問（校長、副校長） 大槌町（関根友人宅）へ	大槌泊
4 日目	大槌町滞在	大槌泊
5 日目	大槌町滞在	大槌泊
6 日目	気仙光陵支援学校訪問（校長、副校長） 石巻支援学校訪問（校長、教頭）	仙台泊
7 日目	光明支援学校訪問（校長、教頭） いわき養護学校訪問（校長、教頭） 埼玉へ戻り、関根・和泉を降ろし、前田滋賀へ	
8 日目	前田滋賀到着	

4. 報告

最初の訪問校、花巻清風支援学校は内陸に位置し、人的・物的ともに大きな被害はなかった。平成 22 年度の岩手県知 P 連会長校ということで訪問した。当日は、P T A 総会と重なっていた為、菊池会長も同席して頂き、高屋敷校長と共に義援金の用途、受け渡し方法について話し合った。県内の調査の中で物的支援より現金での支援が望まれていることを知り、同校 P T A は既に P T A 独自に被害の大きかった沿岸の学校へ義援金の送金を終えていた。送金方法についても P T A から P T A への口座振込の形を取っていたことから、全知 P 連の義援金については「現金で P T A の口座に」という希望を伺い、会長校として県内の意見集約及び義援金分配を快諾頂いた。また、菊池会長より「全国大会に被災地の声を届ける為に、被災されて大変な思いをしている保護者に何らかの助成を」という要望があった。

続いて、宮古恵風支援学校へ向かう。内陸の花巻とは打って変わり、宮古に入ると津波の被害を目の当たりにし、一同、声を失った。しかし、こちらの学校も高台に位置していて下校時間直前のため、生徒は全員無事だった。学校自体に被害は無かったものの、隣接する作業所の人達や津波の被害にあった生徒と家族が集まってきた為に職員と合わせて 200 人余りが学校で夜を明かしたという。この経験から学校の備蓄、医療的ケアが必要な生徒の為に発電機などの必要性を実感したとのこと。義援金については現金で頂ければこれらの用意に臨機応変に対応できるので、物資よりも有難いという意見を頂いた。また、避難所での生活については、生徒と住民の間の目立ったトラブルも無く思ったよりも落ち着いた状態で暮らせているとのこと。これは「日頃からの地域とのつながりが成せること」であり、「困難な状態の人の情報も大切だが、落ち着いて暮らせている子ども達のこと全国の皆さんに伝えて欲しい」とおっしゃっていた。

翌日から土日で学校が休みのため、大槌町にある私の友人のお宅にお世話になった。こちらのお宅は吉里吉里地区の高台にある為、津波の被害は逃れたが、地震により建物への被害があり、補修工事等をわずかながらお手伝いした。被災校とは直接関係がないが、友人の幼なじみが数名命を落とした話や、家族の「不思議な偶然」によって命が助かった話等を伺い、改めて震災の残した傷跡の深さを知った。

週が明けて月曜日の朝、友人宅を後にして、大船渡市にある気仙光陵支援学校へ。こちらの学校は今回伺う中では初めて、生徒さんが亡くなっている学校ということでこちらの気持ちも一層引き締めて伺った。亡くなったのは当日インフルエンザによる学部閉鎖があった高等部の生徒 2 名で、一人は自宅で、一人は罹患していなかった為、祖母、叔母らと共に訪れていた陸前高田で被害にあったとのこと。

2 人とも御遺体は収容され、火葬までは行われたがこの時点で葬儀は出来ておらず、また、同行した家族は全員は見つかっていないということであった。当然ながら

ら、話をする校長先生の表情は悲しみがあふれていて、こちらの気持ちも重たくなっていた。しかし、その後校内を案内して頂き、元気に過ごす子ども達の姿を見て救われもした。また、寄宿舎の防災対策の話をする、「校長、職員の公舎が敷地内にあるので、夜間の災害にも対応できる」そうである。

続いて、午後から石巻支援学校を訪問。こちらの学校も高台にあるが震災当日は小・中学部卒業式の為、高等部は休業、小・中学部も 11:30 に下校しており、自宅等で4名の生徒が亡くなった。櫻田校長は「学校にいれば助かっていた」と悔やまれていた。通学区域が広範囲に及ぶ為に生徒の安否確認に多くの時間と労力を費やしたという。また、地震発生直後から市街地から比較的近い高台にある為、指定避難所ではなかったものの、近隣住民や、要支援者が集まり、急遽避難所として機能することとなり、訪問前日の5月9日によく全員撤収し、当日はクリーニングや荷物の整理に追われていた。同校は宮城県内で最も遅い5月12日の始業式を行うということで、櫻田校長も始まってからの生徒や保護者の心のケアに向け準備を進められているとの話であった。

その日の晩は仙台市内に泊まり、翌日仙台市にある宮城県知 P 連会長校・光明支援学校へ。こちらも高台で内陸のため、被害はほとんどなかった。同校は通学区域が仙台市内の2つの区のみで面積が狭いことから、安否確認には徒歩・自転車・バイク等で回ることが出来たといい、また、震災前から教職員が暮らす地域の生徒を受け持ちの関係なく、非常時には連絡を取り合うシステムを構築していて、今回はそれらが大きな役割を果たしたとのこと。仕事の都合で P T A 会長はおいでにならなかったが、こちらも宮城県内の情報集約と、義援金処理についてご協力頂けることを確認した。その後、同様に福島県知 P 連会長にも協力を要請し、快諾頂いた。

最後に福島県にあるいわき養護学校へ。こちらも学校は内陸部のため大きな被害は無かったものの、福島原発から 40km に位置し、訪問時現在で避難地域にある富岡養護学校から 11 名の生徒が避難してきている。同校も今後の状況によっては避難の可能性があることから、教職員がいくつもの事態を想定してマニュアルを作る等の準備を進めているとのこと。

5. まとめ

以上の報告は私が感じた主観も含めた大まかなものである。以下は各校に共通すると感じた事項。

- ・ 生徒、保護者の心のケア
- ・ 未だに避難所から通う生徒が大勢いる
- ・ 被害の大小にかかわらず保護者の離職が多発し、経済状況の悪化

- ・ 食料、発電機等の備蓄
- ・ 災害時の連絡手段の確保
- ・ 「居住地交流」などの普段からの地域との連携の必要性
- ・ 義援金については現金での送金を希望
- ・ 全国大会への被災地からの参加への配慮
- ・ 大変ではあるが前を向いて頑張っていること

これらは訪問した震災後2ヶ月の時点での現状である。行くまでは「一刻も早く」という気持ちがあったが、現地に行ってみるとそこには1週間後には1週間後の、2ヶ月後には2ヶ月後の、1年後には1年後の問題があるのだと感じた。その時々
の問題、悩みを受け止めて、全知P連として出来ることを模索して行くこと。同時に、被災地の教訓を「生き節」として、各地の学校・地域において防災対策の立て直しをはかる為の情報共有が必要だと感じる。

今回の被災地の調査結果が総会、全国大会をはじめとした全知P連の活動の中で、被災者の声とともに全国の会員に届き、今後子ども達の教育環境づくりに役立つことを願って止まない。

最後になるが、いわき養護学校の菊地校長がおっしゃった「普通に学校があるということ」を真っ先に伝えて生徒、保護者に安心してもらいたかった」という言葉に我々、知的障害教育校、ひいては学校が持つ役割の本質を感じたことをお伝えして報告を終える。